

ありふれた話

作 北村耕治

## #この戯曲を読むにあたって

この戯曲は、上演時間60分を想定しています。  
本文中に登場するいくつかの記号は、次のような意味をもちます。

「二」…………… 同時発話  
Z…………… 次の台詞による打ち切り

## #登場キャラクター

富田

塩谷

一子

猫

他

## #

舞台は抽象空間とする。  
話者の語る言葉によって、そこは人家となり、路上となり、海となる。

劇中は様々な人物が登場するが、出演する俳優たちが分担して演じ分けるものとする。

富田、塩谷。

富田 なんか朝からヘンだったんだよ。

塩谷 うん。

富田 昭島で親戚の集まりがあつてさ。昭島でメシを食うとか、そこからちよつともうヘンだもん。だつて行ったことなかったし。近所だけだね。実際、実家から車で30分くらいの距離だったし。でも実家にいた頃も昭島にメシ食いに行こうなんて一度もなかったしね。しかも親戚も一緒なんて。それが青梅の親戚だけならまだ分かるけど、長野の人たちまでわざわざ車で出てきてさ。

塩谷 長野から。すごいね。

富田 でしょ、これはイレギュラーですよ。誰かの結婚式でしかつて。向こうで法事がある時はそうなるけど、なぜ昭島っていう。しかもなぜかたまたま、俺の誕生日っていうね。

塩谷 それはぶつけたんですよ。

富田 違う違う。そんなの誰も気にしないよ。

塩谷 そんなことないでしょ。

富田 いや、本当そうだよ。多少何かあるかと思っただけで本当になかったし。まあそれはよくつて、とにかくヘンな会合だよな。って思いながら埼玉の端っこのから武蔵野線乗つて、中央線乗り換えて、で立川で降りてあー青梅線ね、あんまり乗らないわとか考えてたら姉にバツタリ会つて。

姉1、登場。

姉1 おう。

富田、目で応じベンチシートに座る。  
姉1、その横に座る。

富田 秋田のお米、おいしかった。

姉1 でしょう、そうでしょう。あれはソウヘイさんのご実家で作ってるお米でね。ミヤちゃんのとこに急にドサツて送られてきたんだって。

富田 ミヤちゃんていうのが母方の親戚なんだけど、この人は血がつながってなくて、伯母さんの養子か何かで。姉ちゃんとなんかに歳が変わらないからなんか仲いいみたいで。で、その辺りから来たらしいお米がちよっと前に、巡り巡ってうちに届いてて、

塩谷 じゃ、その集まりってミヤちゃんも来たんだ。

富田 来ないよ。

塩谷 来ないの。

富田 だって父方の集まりだから。ミヤちゃん

姉2 うん。

富田 なんか、泣いてた。

母 それ、あの後。前？

チャイムが鳴る。

母、返事をして退場。

富田 あとあと。

姉2 そんなの自業自得じゃん。

富田 そういふ言い方もありますけど。

姉1 でも応えたんだね。自分でも。

姉2 だったらさあ、最初からあんな演説しなきゃいいじゃん。

姉1 顔見たら言いたくなっちゃったんでしょ。

母、登場。

母 お寿司来たよお、

一同、嬌声を上げる。

富田 食事会の後、ぼくたちは姉夫婦と母の車

は母方だから関係ない。いやそもそもね。その食事会にしたって、うちは関係ない話だったんだよ。

居間。

姉1 だから光政おじさんと一子さんを和解させるために、瞬くんが一肌脱いでみんなを集めたんでしようよ。

姉2 そんなんだつたらさあ、何もあたしたちまで声かけることないじゃん。ねえ？

富田 まあね、

母 そうでもないとおじさんをひっぱり出せなかったんじゃない？あの人警戒心強いし。

姉2 でも完全に裏目じゃない。あんなことになつて。

姉1 一子さんだつて立つ瀬ないよね。

姉2 そうだよ。

富田 でも俺、トイレでおじさんに会ったけど。

に分乗して八王子まで墓参りに行った。うちは4人兄弟で6人家族。父はもう墓の中だけど、入れ替わりに姉の旦那がいたからやつぱり6人で、そのまま実家へ戻って寿司をとった。母ちゃんがまたはしゃいじゃっているんな酒が出てきて、みんなどんどん酔っぱらって行って、一向にお開きの気配はなかったけれど。ぼくは暗くなる前に家を出た。

バスが来る。

富田、乗車する。

富田 バスに揺られているうちどんどんと日が傾いていって、街に着く頃にはとつぷりと暮れていた。その日は朝からずっと暑くもなく寒くもなく、夜になってもその過ごしやすさはひとつも変わらなかった。少し街を歩きたくなくて、放射線通りの入り口のところまでバスを降りた。高校生の頃よく歩いた路地を縫うよ

猫 おまえ鮎食ったろ。  
富田 は、  
猫 はじゃねえよ。鮎食ったろ。  
富田 はい、  
猫 いい身分だねえ。  
富田 ちよつと集まりがあったんで、  
猫 わたしやカリカリですよ。安物の。  
富田 いや知らないし、  
猫 どのの？  
富田 え、  
猫 どのの鮎食ったの。  
富田 金寿司っていうとこの出前ですけど、  
猫 金寿司！おまえ金寿司食ったの？  
富田 え何？何？  
猫 あそこは最近ね、いい職人が入ったんだつて。だから鮎がうまくなったって、みんな言ってるよ。  
富田 はあ、  
猫 いい身分だねえ。

うにして歩いていると、猫がいた。  
猫、食事をしている。  
富田 小皿に盛られたドライフードをつまらなそうに食べている。毛がばさばさとして薄汚れてる。みすぼらしいのに変な貫禄があつて、何か懐かしいようなどこかで見たような、でもどこでとか考えていたら、  
猫 何見てんだよ。  
富田 猫がしゃべった。  
猫 おい。シカトすんなよ。何見てんだよ。  
富田 すみません。  
富田、去ろうとする。  
猫 待て待て待て、オイ。どこ行くんだよ。  
富田 だって、駅ですけど。  
猫 急ぐの？  
富田 いや、別に。  
猫 なんだよお。じゃ話そうぜえ。トークトー

猫、鼻を蠢かす。

富田 はあ。  
猫 おまえどこから来たの。  
富田 川口ですけど。  
猫 埼玉か。  
富田 いや、そつちじゃなくて。あの、秋川街道をまっすぐ行った先に／  
猫 冗談冗談。八王子の川口でしょ。分かるよ地元じゃあん。  
富田 はあ。なんかイライラする。  
猫 でもさ、土地の名前には由来ってものがあるだろ。  
富田 え、  
猫 同じ地名だつてことは土地の位相もそう変わらないってことも多いもんだよ。  
富田 いそう、  
猫 分からないかな。だからおまえがね、埼玉の川口出身と言いつてもそう変な話じゃないヨつてことだよ。  
富田 やっぱちよつと、分からないです。  
富田 そろそろ行きますね。  
富田、去ろうとする。  
猫 待てよ。何おまえ。なんでそんなすぐ帰りがたがるの。  
富田 そういうわけじゃないですけど。なんだろう、めんどくせえな。  
猫 あれ。  
富田 え、  
猫 おまえ、境目にいるのか。  
富田 境目。なんですかそれ。  
猫 今日はいつとも違うだろ。  
富田 確かに、いつもとはちよつと違います。  
猫 一つ忠告してやろう。おまえ。近々何かを失うぞ。  
富田 失う？何ですかそれ。  
猫 ナニかだよ。  
富田 何かって、  
猫 知っちゃうとつまらないだろ。ヒトとかモノとか、あるいはそれ以外のナニか。そ

ういうもんだよ。  
富田 えーそれ、えー！呪いですか。俺が鮭食べたから？

猫 おまえなんか呪っても仕方ねえよ。

富田 本当ですか。

猫 俺がウソを言いそうに見えるかい。

富田 いや分かりませんが。いやなんですけど。

猫 (笑う)

富田 何笑ってんの？だって嫌でしょう。何も

失くしたくなんかないよ。

猫 そんなにたいしたモノか。

富田 何がですか。

猫 おまえが失くしたくないと思っっているそれはさ。そんなに立派なモノか。そもそも、それは本当におまえのモノか。

富田 失礼しますね。

猫 待って待って。

富田 もう、なんですかもう！

猫 牛じゃないんだからモウモウ言うなよ。

猫 旅のお伴に。

富田 これ、失くしたりするとどうなるんですか。

猫 失くす？

富田 なんか、落とすととか。間違って捨てちゃうとか。

猫 どうもならないよ。家が燃える、詐欺に遭う、不治の病にかかる。あらゆる嫌なこと全般、おまえの身に起こるだけだよ。

富田 普通に呪いじゃん。

猫 祟りだよ。

富田 一緒だから。やっぱいりません。

猫 ただ持つてりゃいいんだよ。そしたら何も  
ないよ。

富田 ずっと持つてなきゃいけないの？

猫 その時が来れば自然と縁がなくなるよ。

富田 ……、

猫 下手なこと考えるなよ。俺は見てるから  
な。

猫、退場。

ちよっといらっしやい。いいモノをやる  
う。

富田 いいもの？

猫 そこに祠があるだろう。

富田 はあ、

猫 それ開けて。

富田 これ？なんで、

猫 いいから開けて。

社の奥から、袱紗が出てくる。

富田 なんですかこれ。

猫 なんでもいいよ。とっとけ。

富田 いや怪しすぎるでしょ。いらないんです  
けど。

猫 そう言うなよ。きっと役に立つから。

富田 はあ、

猫 ほら仕舞って。

富田 え、

猫 いいから。ほら、

富田 (袱紗をカバンに仕舞う)

富田 消えた。ぼくは横浜線のホームに立つ  
た。

電車が到着する。

富田、乗車する。

ベンチシートに座る。

富田 電車に乗り込んでから、どんどん不安になつてきた。呪いだか祟りだか知らないけど、これはきつとロクな話じゃない。トラブルだ。お祓い受けるとか、魔除け買うとか、何かした方がいい気がする。とりあえずググった。

ふと、隣に座っていた乗客が富田に気づき、顔を覗き込むようにする。

塩谷 富田くん？

富田 塩谷ゆかりだった。

塩谷 ウソでしょ。

富田 いやいやいやこっちのセリフだから。何  
してんの。

塩谷 帰るんだよ。  
富田 え八王子で働いてるの？  
塩谷 そうだよ。  
富田 どこに帰るの。  
塩谷 厚木。  
富田 あれ、府中とかじゃなかったっけ。  
塩谷 そうだけど。今日は実家。  
富田 飲み行こうよ。  
塩谷 いつ？  
町田。  
居酒屋。  
富田 慰謝料って、相手から取るものなんだ。  
塩谷 そうだよ。旦那さんからもらってもしよ  
うがないじゃん。財布一緒なのに。  
富田 でもそんなのさ、けつきよく旦那が出し  
ちゃうんじゃないの。  
塩谷 相手の女に渡すってこと？  
富田 そうそう。  
塩谷 そんな甲斐性ないよ。稼ぎは把握してる  
富田 うん。  
添付ファイルあるから開くじゃん。  
塩谷 アヒル口の女がこうやって顔の一ヶ所  
を指さしてるの。なるほど吹き出物あり  
ますよ、そこには。自撮りで、こうバス  
トアップなんだけど。  
富田 うん。  
塩谷 なぜか裸なんだよね。  
富田 ぜんぜん懲りてねえ！  
塩谷 そうなのよ。  
富田 その人、馬鹿なんだね。  
塩谷 馬鹿だと思っしよ。それ以上になんだろ  
う。ナメてるんだよ、牛タン女。  
富田 牛タン？  
塩谷 そいつ仙台にいるから。  
富田 それ、どうするの。  
塩谷 もう一回取るよ。  
富田 慰謝料？  
塩谷 即スクリーンショット。LINEで転送  
して、また弁護士に転送して。

し。  
富田 いくらももらったの。  
塩谷 100万。  
富田 すごいね！  
塩谷 安いほうだよ。  
富田 知らない世界だわ。  
塩谷 知る必要ないよこんなの。  
富田 さすがに100万払ったら懲りるだろ  
うね。  
塩谷 一部分割だけだね。  
富田 え、月いくら？  
塩谷 3万。  
富田 うん、きついわ。やっぱ懲りるわ。  
塩谷 でもこの間ね、旦那が風呂入ったから携  
帯チェックしたら、  
富田 待つて待つて。それ旦那の携帯？  
塩谷 うん。そしたらさ、またその女からメー  
ル来てて。  
富田 ほう。  
塩谷 ニキビが出来たから見てほしいって。で  
富田 手際いいね。  
塩谷 追加で50は堅いそうです。  
富田 それさ。勝手に携帯いじられて旦那怒ら  
ないの？  
塩谷 LINEの履歴消しちゃえば分からな  
いじゃん。  
富田 旦那の浮気話は丸々2時間続いた。  
塩谷 なんて喋っちゃったんだろう。  
富田 何が、  
塩谷 あたし、この話。本当にごく限られた人  
にしかしてないから。  
富田 遠いからじゃない。  
塩谷 え、  
富田 だって俺たち、友達ではあるけども。そ  
んなしよっちゅう連絡取りあつたりと  
かするわけでもないじゃん。むしろ同窓  
会くらいでしか会わないでしょ。  
塩谷 うん。  
富田 ぜんぜん知らない仲じゃないけど、適度  
な遠さがあるから。だからかえってちよ

うじよかったんじやないの。  
塩谷 そっか。

塩谷、財布から金を出そつとする。

富田 いいのいいの。

塩谷 え、

富田 会計済んでるから。

塩谷 なんて、

富田 ここさあ。まだ東京なんだね。

塩谷 まあ。端っただけ。

富田 ここから実家って近いの？

塩谷 近いよ。30分くらい。富田くん、どうするの。

富田 鎌倉にでも行くかなあ。

塩谷 わああ、

鎌倉。

ひなびたホテル。

富田 なんか朝からヘンだったんだよ。

塩谷 うん。

富田 そうだよ。

塩谷 めちゃめちゃ変じゃん。

富田 でも行ったとしてもさ、今更だったのかもね。家出して以来、おばさんが入院してから一度も顔見せなかったって言うし。

塩谷 そうは言っても亡くなっちゃったら関係ないでしょ。お葬式も来なかったの？

富田 多分。

塩谷 それはダメだよ。てゆうかその旦那、何したの。

富田 詐欺。

塩谷 ダメなやつ引いたねえ。

富田 よく変な噂が流れる人だった。偽札作ってるとか、どっかで誰か怪我させたとか、

塩谷 え仕事は？何してる人？

富田 一応、ミュージシャン？

塩谷 アウトアウト。ないわあ。偽札作るミュージシャン。ダメの見本みたいな人

富田 昭島で親戚の集まりがあつてさ。昭島でメシを食うとか、そこからちよつともうヘンだもん。

塩谷 鎌倉のホテルに入った。電車の中で、小声で誘われた。正直実家に戻っても旦那のことでぶちぶち言われるのは見え透いてたから、ちよつよよかった。それにあたしは、もう少しこの人と話していたかった。

富田 聞いている？

塩谷 え、

富田 どうしたの。

塩谷 なんでもない。じゃ、その光政おじさんと一子さんっていうのは、もう絶縁状態だったんだ。

富田 らしいよ。そういうの、全然知らなかったんだけど。でも今考えると去年。長野でおばさんの三回忌があつた時、一子さんいなくなつたんだよ。

塩谷 え、自分の母親でしょ。

だね。

富田 そうね。

塩谷 だいたい音楽とか演劇の人とかつて基本クスじゃん。燃えるごみが歩いてるようなもんじゃん。

富田 いや言い過ぎだよ。

塩谷 でも少なくともその人はそうじゃん。それを選んじやつたんだよ。

富田 まあそうね。

塩谷 一子さん、見る目ないね。

富田 きれいな人なんだけどなあ。

塩谷 どうでもいいし。

富田 いや、子供の頃あこがれてたんだよ。

塩谷 だからどうでもいいから。それで、

富田 え、

塩谷 続き。

富田 で、富田の自家の人たちが順に前に出て家族の近況を話す時間があつてさ。光政おじさんの番が来て、

宴会場。

光政 20年前です。つまらない男に引つかかって家を飛び出した娘がいました。育ててやった恩も忘れて。ずいぶん苦労したらしい。母親が倒れても、一度も顔を見せなかった。その間もヤツをたぶらかした男は愚行を重ねて、今は塀の中にいるそうです。馬鹿馬鹿しい。馬鹿に引つかかるのもやっぱり馬鹿だ。こんな馬鹿な女をいまだに娘と呼んでいいものだろうか。馬鹿は今、私の目の端に映っています。ツラの皮が厚いというか、

富田 いい加減にしろよ！

塩谷 富田くん、かつこいいい。

富田 違う違う、これ瞬さんという、一子さんの弟ね。

塩谷 なんだ、

光政 もういつぺん言ってみろ。

富田 いいかげん許してやれよ。姉ちゃんだって被害者だろ。

光政 俺も被害者だよ。高い金払って大学まで

出してやって。それが、なんだ…、おじさん、ふらーって出てっちゃって。瞬さん、追いかけて。シーンとしちゃって。そのまましょんぼりした感じで終わっちゃった。

塩谷 一子さん、ずっと居たの？

富田 気がついたらいなくなってた。

塩谷 なんか、派手だね。

富田 派手？

塩谷 うちの親戚、そんなドラマチックなことないもん。

富田 自分ドラマチックじゃん、

塩谷 安っぽい。ありふれた話だよ不倫なんか。

富田 まあね、

塩谷 お父さんに申し訳ないわ。

富田 あれ、塩谷んちって、

塩谷 一緒一緒。うちもお父さん、亡くなってるよ。

富田 そっか。明るくなってきたね。

塩谷 もう寝ないで行くかなあ。

富田 休めばいいのに。

塩谷 休まないよ、会議あるもん。でも半休取るかなあ。

富田 悩ましいねえ。

塩谷 明日何するの。

富田 決めてないけど。でもここまで来たらやっぱさ。

#### 材木座海岸。

塩谷 海ですねえええ。

富田 どうしよう、海だよ。

塩谷 泳ぎますか。

富田 いや、水着ないから。

塩谷 それは残念、

富田 歩こうか。

塩谷 うん。

#### 塩谷、へたり込む。

富田 おわっ、何！どうしたの、

出してやって。それが、なんだ…、おじさん、ふらーって出てっちゃって。瞬さん、追いかけて。シーンとしちゃって。そのまましょんぼりした感じで終わっちゃった。

塩谷 一子さん、ずっと居たの？

富田 気がついたらいなくなってた。

塩谷 なんか、派手だね。

富田 派手？

塩谷 うちの親戚、そんなドラマチックなことないもん。

富田 自分ドラマチックじゃん、

塩谷 安っぽい。ありふれた話だよ不倫なんか。

富田 まあね、

塩谷 お父さんに申し訳ないわ。

富田 あれ、塩谷んちって、

塩谷 一緒一緒。うちもお父さん、亡くなってるよ。

富田 そっか。明るくなってきたね。

塩谷 休んじやった。

富田 休んじやったね。

塩谷 ダメ人間だよー。

富田 ずっと働きづめだったんでしょ。

塩谷 うん。

富田 じゃあいいじゃん。

塩谷 てゆうかさ。

富田 はい。

塩谷 富田くん、本当に話したいこと話してないでしょ。

富田 なんで、

塩谷 なんか。そんな気がするから。

富田 それが気になるから休んだの？

塩谷 そうじゃないけど。

富田 カバンの中にあるアレが気になった。だけれどこれはただ困っていることで、話したいこととはまた違うような気もする。

塩谷 こっちへ歩いていくと何があるの。

富田 由比ヶ浜でしょ。

塩谷 その先は。

富田 稲村ヶ崎。  
塩谷 その先は。  
富田 七里ヶ浜？  
塩谷 その先。  
富田 え、厚木の人でしょ。分からないの？  
塩谷 こっちのほうは分からないよ。  
富田 なんかあれでしょ。辻堂とか藤沢とかい  
ろいろあるでしょ。  
塩谷 その先！  
富田 えー。だから、小田原とか、熱海とか、  
塩谷 あたし熱海行きたい。  
富田 熱海？  
塩谷 温泉入りたい。  
富田 それいいね。  
塩谷 でしょ！  
富田 でもけっこう遠いよ、熱海。  
塩谷 箱根のほうがまだ近いかな。明日は何して  
るの。  
富田 明日からは普通に仕事。  
塩谷 じゃ今日中に帰ればいいよね。

富田 いいけど。  
塩谷 彼女怒る？  
富田 俺、彼女いるって言った？  
塩谷 言ってたよ。昨日。  
富田 怒らないよ。ずっとほったらかしだし。  
塩谷 誕生日なのに？  
富田 誕生日なのにこんなことしてるからね。  
塩谷 最低ー。  
富田 でもお互いさまなんだよ。  
塩谷 何それ。  
富田 向こうも誕生日に浮気してたもん。  
塩谷 なんてそれ分かったの、  
富田 写真。お台場だかんだか、ジョイポリ  
ス？アトラクションの記念撮影でさ。お  
どけちゃって。  
塩谷 見ちゃったんだ。  
富田 うん。  
塩谷 富田くん、うまくいってないんだね。  
富田 オタクほどじゃないわあ。  
塩谷 うちがうまくいってないよお。めっちゃめ  
っちゃ円満にうまくいってない。  
富田 日本語になってねえし。  
塩谷 これ不倫だよな。  
富田 そうだね。  
塩谷 しかもダブル。  
富田 ダブルじゃないよ。うちは結婚してない  
し。  
塩谷 一緒だよ。浮気だもん。  
富田 でもうちのは慰謝料取れないでしょ。  
塩谷 ああ、そうか。富田くん、うちの旦那さ  
んに慰謝料払ってね。  
富田 俺、100万も持ってないよ。  
塩谷 分割払いできるよ。  
富田 一括で済ませたいなあ。慰謝料の分割つ  
て考えただけで凹む。え、なんで泣くの。  
塩谷 ごめん。夫婦って、こんなもんなあ。  
富田 分かんない。俺、結婚したことないから。  
塩谷 ごめん。そうだね。  
富田 でもなんか、そんなにいいもんじゃない  
んだなって。誰を見ても思う。

塩谷 またサンプル増やしちゃったね。  
塩谷、カバンを探る。

塩谷 ティッシュなんかはないよね。  
富田 ないねえ。  
塩谷 ；あれ。  
富田 どうしたの。  
塩谷 なんか忘れ物したかも。  
富田 え、何。  
塩谷 ちよっと、  
富田 ホテル？  
塩谷 たぶん。  
富田 取り行く？  
塩谷 ごめん。  
富田 いいよ。すぐそこじゃん。  
塩谷 指輪が、結婚指輪がなかった。洗面台で  
外したのは憶えてる。だって外すよ。外  
すでしょう？富田くんがそう言ってく  
れたから、ホテルまで戻った。

路上。



そこには昨晚ホテルがあった。はず。

富田 ないね。

塩谷 ウソ。

主婦、通りがかる。

富田 すみません。このあたり、ホテルありませんよ、  
したよね、

主婦 ホテル…、

富田 名前なんだっけ、

塩谷 ライターは。

富田 ああ。(探す)あれ、ないわ。なんか、  
なんだっけ、なんとかホテル。

塩谷 それじゃ分からないよ。

主婦 たぶん、駅まで行かないとそういうのは  
ないですよ。

富田 そうですか。

塩谷 ありがとうございます。

主婦、退場。

塩谷 え、どうしよう。どうする？

富田 どうしようねえ。

塩谷 …いいや、行こう。

富田 いいの？

塩谷 必要なかったんだよ。きつと。

塩谷、去ろうとする。

富田 ごめん、

塩谷 え、

富田 これもしかして。もしかして俺のせいかな  
もしれない。全部しゃべった。八王子で  
猫に会ったこと。なんかよく分からない  
ことを言われて、妙なモノを託されたこ  
と。ホテルが消えたことは、もしかした  
らそれと関係あるのかもしれない。塩谷  
は訝しげに聞いていた。話したことを、  
後悔し始めた。

塩谷 その猫さ。尻尾どうだった？

富田 尻尾？

塩谷 猫股かどうかでだいぶ話変わるのよ、そ

富田 ここだったよねえ。

塩谷 今朝、ここから出たよね。

富田 でこう歩いて、この道入って駅まで出た  
よね。

塩谷 え、これ怖い話？

富田 なんかくうい話あったな。

塩谷 何それ。

富田 小説で読んだことがある。男の人が家に  
帰るとき、玄関の扉が開かないんだよ。

鍵穴がないの。だから入れない。

塩谷 そんなの壊せばいいじゃん。

富田 そういことじゃないんだよ。観念的な  
ことだから具体的な対応とか意味ない  
の。で理不尽だけど帰れなくなっちゃっ  
た男があちこちフラフラするっていう  
話で、その中で、やっぱり泊まったホ  
テルが蒸発しちゃうっていうのがあっ  
た。

塩谷 まんまじゃん。

富田 でしょう。

れ。

富田 ねこまた、

塩谷 妖怪。だとすると尻尾が2本、多くて7  
本。

富田 どうだろ、気にしてなかった。猫股じゃ  
なかったらなんなの？

塩谷 分からない。でもこういうのって、大抵  
半々なんだよ。ただからかわれてるだけ  
かもしれないし、本当に何か、富田君の  
身に起ころうとしているのかもしれない  
し。

富田 え、何。なんか塩谷って、そういうの詳  
しいの？

塩谷 ちよつとだけね。

富田 そうなの！？え、じゃどうしよう。これ  
からどうしたらいいかな、

塩谷 その預かりもの、見せて。

富田、袱紗を取り出す。

塩谷、袱紗の中を模めると御守袋が出てくる。

塩谷 イタズラだね。悪気はなさそうだけど。  
富田 そう、  
塩谷 箱根行く途中、どっかで捨てよう。

富田、へたり込む。

塩谷 何、どうしたの？  
富田 なんか安心して、  
塩谷 怖かったでしょう。  
富田 思ったより、そーみたい。  
塩谷 怖かったねえ、  
富田 いやあ、怖かったんだね、  
塩谷 立てる？

東海道本線。

アナウンスから、小田原方面へ向かっていることが  
知れる。

塩谷 ほどけてるのかもね。こーやって、あた  
したちが今いる世界があるじゃん。  
富田 うん。  
塩谷 でも世界つてさ、今目の前にあるものは

富田 毛糸玉。

塩谷 例えばね。だから富田くんがしゃべる猫  
と会ったり、ホテルが消えちゃったりし  
たことつていうのは、そーいう世界のほ  
どけていつてる場面にたまたま立ち  
会っちゃったってことなのかもね。

富田 塩谷つて、  
塩谷 うん。  
富田 何者？  
塩谷 ただのふしだらな女です。

アナウンスが小田原に到着したことを告げる。

富田 乗り換えだ。  
塩谷 ……、  
富田 どうしたの？  
塩谷 箱根、やめようか。  
富田 いいけど、  
塩谷 フェリーに乗ろう。  
富田 塩谷の提案はこうだった。久里浜から出  
ているフェリーに乗って、浦賀水道を渡

確かかもしれない。確かに見えるかもし  
れないけど、その端っこの方つて案外ほ  
どけてるんじゃないかって思うんです  
よ。

富田 どういうこと。  
塩谷 だから、ほら。宇宙があるでしょ。宇宙  
はあたしたちが生まれるずっと前から  
今に至るまで延々と拡がり続けている  
じゃないですか。

富田 そうなの？  
塩谷 そうだよ。あたしたちがこーしている間  
にも、宇宙はすごい速さでずーっと  
ずーーっつと拡がり続けているんだ  
よ。

富田 へえ。  
塩谷 その拡がり続けている端っこつていう  
のは、見方を変えればどんどんほどけて  
いつてるとも言えるでしょう。

富田 何が？  
塩谷 だから、例えば毛糸玉みたいなものが。

る。その間に東京海谷と呼ばれる物凄く  
深い谷があるらしい。そこにこれを捨て  
ようつて。重しをつけて、深い海の底に  
沈めてしまおうつて。これにたいした力  
はないらしいけど、その辺に捨てて、ま  
た違う誰かに迷惑かけても困るからと  
いうことらしい。最終19時10分発の  
フェリーに乗り込んだ。船は20時まで  
には房総半島、富津市の金谷に着く。そ  
こから先は何も決まってる。終わりが  
見えない。

船上。

甲板から、東京湾を眺めている。

塩谷 見えそうもんだけどな。  
富田 だって何十kmも先でしょ。  
塩谷 海しかないのに。  
富田 そうだけさ。  
塩谷 本当に全然違うんだよ。東京タワーは全  
体がこうキラキラしてて、そのまま切り

取って、どこか飾っておきたくなる。でもスカイツリーはね、なんかこの辺に青とか緑の輪っかが「ハイハイ、どうすか？」みたいな感じで回っててハア？て気持ちになる。

富田 ずいぶん嫌うね。

塩谷 嫌ってないよ。それくらい違うんだよ、歴然と。並べちゃうともう、圧倒的に東京タワーなんですよ。

富田 じゃあスカイツリーって、壮大な引き立て役なんだね。

塩谷 それ聞いたら東武鉄道の人、泣いちゃうね。

富田 いや、言ってるのはあなただからね。

塩谷 (スマートフォンを操作する)

富田 地図？

塩谷 もう少し。

富田 何が。

塩谷 これを処分する場所。

富田 これ、不法投棄だよね。

富田 違う。もつと不穏な電話。

塩谷 出ないの。

富田 出ないよ。

富田、携帯電話を仕舞う。

富田 やっぱり飲み過ぎかなあ。

塩谷 飲み過ぎだよ。だってそれ何本目？

富田 そうじゃなくて。あれ、見える？

塩谷 え、

富田 あれ、

塩谷 息を呑んだ。彼の視線の先にあったのは、これまで生きてきた中で一度も見えたことのない何かだった。

富田 蛇？

塩谷 彼が言うみたいに、蛇みたいな何かがある、海面をのたくっていた。ただ、大きい。異常に大きい。大蛇とか、そんなレベルじゃない。怪物だと思った。もしこの船に巻きつかれたらひとたまりもない。それほど大きな、得体の知れない何か。ぬ

塩谷 生きてたら、普段使わないモノサシさなきやいけない時もあるよ。

富田 塩谷って男前だね。

塩谷 女子女子。俺女子だから。向こう着いたらどうしようか。

富田 車乗りたいな。

塩谷 バスとか？

富田 そうじゃなくて。運転したい。

塩谷 免許あるの、

富田 あるよ。レンタカー借りちゃう？

塩谷 でも明日だね。

富田 そうね。俺もうへろへろだわ。

塩谷 ずっとビール飲んでるからだだよ。

富田 こんなもんだよ、休みの日はいつも。

富田、携帯電話を取り出す。  
電話が鳴っている。

塩谷 彼女だ。

富田 違う。

塩谷 じゃ会社だ。

めぬめとした身体が月明かりに照らされて。どこか優雅に、身をくねらせていた。

富田 何してるのかな。

猫 待ってるんだよ。

塩谷 猫がいた。

猫 そいつをさ。

富田 なんでここにいるの。

猫 見てるって言ったろう。ほら。上からも集まってきた。

塩谷 鳥たちが船の回りを旋回していた。カモメ、ではない。ウミネコでもない。翼がとて大きくて、首がふたつあったり、尾羽根がやたら長かったりいくつにも裂けていたり。そういえばこの猫は、猫股ではなかった。もつとずっと柔らかくて、暖かい…、あ。そっちか。

猫 女。

塩谷 はい、

猫 余計なことしてくれたな。

塩谷 ごめんなさい。  
富田 え、謝っちゃうの？  
塩谷 ごめん、富田くん。この猫、そんなんじゃない。  
富田 何、そんなんって、  
猫 なんでもいいんだよ。とにかくこれは、こんなところ捨てちゃダメだ。分かったら。  
頼むよ。  
塩谷 はい。  
富田 え、何が分かったの？捨てないの、  
塩谷 猫はひらりと手すりに飛び乗って。あたしたちに一瞥をくれると吸い込まれるように海へと飛び込んでいった。あつという間もなく、白波の中に消えてしまった。そのうち巨大ウミヘビが見えなくなつて、鳥たちも去つていった。富田くんは黙りこんで、ビールを飲んでいた。船着き場が近付いてきた。そのあたりの空だけが、オレンジ色に輝いていた。

旅館。

女中がいる。  
女中 お住まいもその辺り？  
塩谷 いや、家は東京なんですけど。  
女中 明日はどこへいらつしやるんですか。  
塩谷 決めてないんです。  
女中 あら、  
富田 ドライブしようとは言ってるんですけど。  
女中 マザー牧場、行かないの？  
塩谷 あー、  
女中 割引券あるわよ。  
塩谷 いいですねえ。  
女中 観覧車もいいわね、よく晴れてたら。あそこは元々、東京タワーの建設予定地だったんですよ。  
塩谷 へえ、  
女中 ほぼ決まりだったつて言うんですけど。  
最後の最後で港区に掠め取られて。それでこの土地どうすんだつてなつて牧場にしたんですよ。

富田 じゃ、そこに建つたら千葉タワーだったんですよ。

女中 さあ。でも東京タワーつて、正式名称じゃないのよ。

富田 え、

女中 正式にはね、日本電波塔つていうの。

富田 へえ、

女中 お湯はどうでした？

塩谷 あ、よかったです。すごく。

女中 この辺りはナトリウム系だから、お肌ツルツルになるのよ。

塩谷 そうなんですか。

女中 あたしを見てよ。

塩谷 ……、

女中 じゃ、ごゆつくり。

富田 あの、

女中 はい、

富田 何か、つまみになりそうなものあります？

女中 板場もう閉めちゃつてるんですよ。

塩谷 まだ飲むの？

富田 だつてそこにあるから。

塩谷 底なしたね。

富田 これからどうしようか。

塩谷 これからつて。

富田 いろいろ、

塩谷 御守りはしばらく持つて大丈夫だよ。

富田 持つてどうするの？

塩谷 持つてるだけでいいんだよ。

富田 だつて、いつまでよ。

塩谷 そのうち分かるよ。

富田 はあ。

塩谷 あとなんか気になる？

富田 うーん…、

塩谷 ま。何かあれば。あとあたし、ここは出すから。

富田 何で。

塩谷 だつてずっと富田くんに払って貰つてるじゃん。フェアじゃないよ。

富田 いいよそんなの。

塩谷 景気いいんだねえ。

富田 よくないよくない。カードだもん。

塩谷 大丈夫なの？

富田 明日は帰る？

塩谷 どうしようね。

富田 旦那さんにはなんて言ってるの。

塩谷 実家にいることになってる。実家には府中戻ったことにしてるし。

富田 じゃ大丈夫か。

塩谷 そっちは？いいかげん彼女気にするでしょ。

富田 しないしない。そういう人じゃないよ。

自分だつて何日も帰らないで平気な顔してるんだから。

塩谷 富田くん、そういう時怒らないの。

富田 最初は怒つたよ。でもそのうち、何にも

富田 昨日だつてほとんど話してないし。

わっ、

塩谷 何、

富田 昨日のことが、もう1週間くらい前みたいに見える。

塩谷の携帯電話が鳴る。

塩谷 見て見て。これ弁護士。

富田 ああ。出ないの？

塩谷 こうしちゃう。

携帯電話が鳴りやむ。

富田 いいの？

塩谷 不穏な電話だから。それより何か話そう。

富田 話した。その夜もいろいろな話をした。小さい頃のこと、仕事のこと、家族のこと、共通の友人達のこと。その間も何度か塩谷の携帯電話が鳴って、彼女はずつと無視していた。だけど、けっきょく電

感じなくなつちやつた。

塩谷 その人つて。

富田 うん。

塩谷 どこがいいの。

富田 分からない。

塩谷 なんだそれは、

富田 じゃそっちは。

塩谷 え、

富田 旦那さんのどこがいいの。

塩谷 分からない。

富田 なんだそれは、

塩谷 一子さんは今何してるかな？

富田 えー、なぜ。

塩谷 いや、ふと思つて。

富田 そういえばあの人、千葉に住んでるんだわ、確か。

塩谷 会いに行こうか。

富田 なんてだよ。おかしいでしょ。

塩谷 従姉でしょ。おかしいことないよ。会つたつていいじゃん。

話を持って部屋を出て行った。一人になつてみて、何か、急に怖くなった。部

屋の襖が開く。一子さんだった。

一子 シゲルくんのお父さんからしたらあたしは初めての姪だったから、ずいぶん可愛がられたんだよ。

富田 そうなんだ。

一子 結婚して、あたしが実家に顔を出せずにいる間もね、時々電話くれて。おいしいもの食べさせてくれたんだよ。

富田 なんか、聞いたことある気がする。一子さんは、親父の葬式には来てたっけ。

猫、登場。

一子 おいで。

猫、一子のそばに寄る。

富田 猫がいた。

一子 おじいちゃんおばあちゃんが生きてた頃はお正月、絶対長野に集まつてたで

富田 うん。  
一子 あたし、八王子の叔父さんに会うのが一番楽しみだった。光前寺に三重塔があったでしょう。  
富田 うーん。神様の犬とかいたよね？  
一子 それは霊犬早太郎。憶えてないかな。早太郎のお墓のすぐそばに、ちよつとした塔があったんだよ。3階建ての。  
富田 上野にあるようなやつ？  
一子 そうそう、ああいうの。昔は自由に出入りできてね。叔父さんと二人で入って見たことがあった。  
富田 へえ、  
一子 中には人の大きさをくらの仏像があるだけで、何にもないの。塔の形してるけど上もスカスカで、踊り場みたいな回廊が巡ってるだけで。あたし、へえーって思いながら中を見まわしたら、  
富田 そう？  
一子 あたしずつと、八王子の子になりたかったんだよ。  
富田 なんて。  
一子 だってうらやましいよ。みんな仲よくて。それぞれ好きなことして立派に暮らして。  
富田 暮らせてないよ。みんな行き詰まってる。  
一子 でもあたしなんかよりずっとマシでしょう。  
富田 マシって何だろね。  
塩谷 赤だよ。  
富田 何が、  
塩谷 ブレーキ！  
富田 おおっ！

車の中。

富田 (息を吐く)  
塩谷 まだ酔っぱらってるでしょう、

猫 一子！これ登れるぞ！  
一子 叔父さん、仏様の頭を足蹴にして、上の欄干に捕まってる。  
富田 親父が？  
一子 そうだよ。あたしこれ、さすがにこの人は今ズイことしてるって子供ながらに思ってる、  
富田 やんちゃだなあ。  
一子 怖くなって泣いちゃったんだよ。  
富田 それ。いつ頃の話？  
一子 ずっと前だよ。あなたたちの一番上のお姉ちゃんが生まれたばかりだったかなあ。  
富田 じゃあぼくが生まれる10年前だ。  
一子 たぶん叔父さんが、今のあなたと同じくらいの頃だよ。  
富田 三十代の親父が、仏様を足蹴にして三重塔を上っている姿を想像した。  
一子 シゲルくん、叔父さんそっくりになったね。  
富田 酔ってない酔ってない。考え事してただけ。  
猫 運転変わってやろうか。  
富田 いいよ別に、てかなんでいるの！？  
塩谷 ちよつと前からいたよ。  
富田 言ってよ！すげえ驚いた。え、何？  
猫 見てるって言ったろ。  
富田 どうするの、これ？  
塩谷 いいじゃん。一緒にドライブしようよ。  
富田 どういうこと？全然分かりませんが、  
塩谷 ねえ。  
富田 え、  
塩谷 見て、  
富田 横断歩道を小人が歩いてた。ワンレンの、ミニスカートの女たちが列を作ってる、扇子を振り回しながら歩いている。それに混じって背の高い老婆が、緑のジャージをはいた男の子の手を引いている。信号が青になっても、その一行が

渡りきらないから動けない。何これ。  
猫 気にするな。すぐ慣れる。  
富田 いやいやいや、慣れちゃダメでしょう。  
おかしいでしょう。  
猫 (笑う)  
富田 何笑ってんの？もう、何？  
塩谷 富田くん、  
富田 はい、  
塩谷 終わった。  
富田 何が、  
塩谷 行列。  
富田 海沿いに九十九里を走る。ぼつぼつと、  
妙なものが歩いてきた。袈裟を着た坊さ  
んが、ゾウを連れていた。首がふたつあ  
る犬。顔色の悪い女が前をはだけて、毛  
むくじやらの赤ん坊におっぱいをあげ  
ていた。  
塩谷 停めて。  
富田 え、  
富田、車を停める。  
富田 名前で呼んでほしくないんですけど。  
塩谷 いいだろシゲル。呼ばせてやれよ。  
富田 はい…、  
猫 シゲル。おまえ犬吠行ったことないの  
か。  
富田 そもそもこっちは来たことないですな  
え。千葉の海って、初めて見た。  
塩谷 あたし、けっこう来てるなあ。まだ旦那  
さんと仲良かった頃さ。勝浦あたりに移  
住しようかって話してたことある。  
富田 へえ、  
猫 もうないのか。  
塩谷 何がですか。  
猫 勝浦に住むこと。  
塩谷 どうですかねえ。犬吠崎まで行く？  
富田 行こうよ。もう、行きたいとこ全部行こ  
うよ。  
塩谷 そしたらあたし、絵はがき買おうかな。  
富田 なんて。  
塩谷 旦那さんに手紙書く。

富田 どうしたの。  
塩谷 今そこ歩いてた人、前の会社の先輩だと  
思う。  
富田 そうなんだ。え、引き返す？  
塩谷 でもその人ね。もう何年も前に亡くなっ  
てるの。  
富田 何これ？  
猫 そういうもんだよ。  
塩谷、クスクスと笑う。  
塩谷 おかしいね。  
富田 全然おかしくないよ。意味分かんない。  
富田、車を出す。  
塩谷 このまま銚子まで行く？  
富田 ああ、そうね、  
猫 銚子行くなら犬吠崎まで行かないとな。  
塩谷 灯台だ。  
猫 シゲルは行ったことあるか。

富田 何それ、書いてどうするの。  
塩谷 分かんないけど。なんかいいじゃん。  
富田 バレるよ。  
塩谷 バラしたいのかもね。  
富田 そしたら100万かー。  
塩谷 分割でいいからね。  
富田 着いた。  
犬吠崎。  
車を停める。

富田 案内小さいね。  
塩谷 そりゃ日本電波塔とは違いますよ。  
富田 そこまでは求めないけどさ。  
塩谷 お手洗い行ってくる、  
富田 ああ、  
塩谷、退場。  
富田 灯台って初めて見るなあ。  
猫 ほう。  
富田 俺、海ってほとんど来ないんですよ。だ

から昨日からずーっと海浴いうろろ  
してて、なんか新鮮。  
猫 家族で旅行とかしないのか。  
富田 しませんでしたねえ。子供の頃はなかつた。  
猫 ないことないだろ。  
富田 いや、ない。  
猫 忘れてるだけじゃないの。  
富田 俺、末っ子だからそういう意味でワリ食ってるんだよね。だって俺が行きたくても、上の人たちはもう思春期とかお年頃だから、家族旅行とか興味なくって、  
通行人が富田を見ている。  
猫 「なにあの人、一人で喋ってる、キモチワルイ」  
通行人、退場。  
富田 聞いてもいいですか。  
猫 なんだ。

富田 これ、いわゆるとり憑かれてるとか、そういう状況なんでしょうか。  
猫 どう思う？  
富田 いや、考えても分からないから聞いているんですけど。  
猫 あそこに女がいるだろう。  
富田 はい、色白美人。  
猫 隣りに男がいるな。  
富田 あのロン毛持ち悪いよねえ。べたべた触ってさあ。付き合ってるのかな、とり憑かれてるといいうのは、ああいうのを言うんだよ。  
富田 あれ人じゃないの？  
猫 分からないか。  
富田 分からないよ。え、ロン毛死んでるってこと？  
猫 いや、あれは生霊。  
富田 ぜんぜん分かんねえ。  
猫 そりやそうか。本人たちだって分かってなさそうだしな。  
富田 ロン毛も？  
猫 ああいうのを求不得苦というんだ。  
塩谷、登場。  
富田 ぐふとつく？  
塩谷 求めるものを得られない苦しみ。だからああやって、念だけが勝手に飛んでいて、相手にまとわりつくの。  
猫 おまえよく勉強してるねえ。  
塩谷 えへへ、  
富田 じゃあれは何？  
猫 ん、  
富田 女の人の頭から、黒い靄みたいのが出てる。  
塩谷 業が漏れてるんだよ。  
富田 ごう、  
猫 種みたいなものだ。  
富田 なんかつらそうだね。  
塩谷 富田くん、もつとひどかったよ。  
富田 え、

富田 これ、いわゆるとり憑かれてるとか、そういう状況なんでしょうか。  
猫 どう思う？  
富田 いや、考えても分からないから聞いているんですけど。  
猫 あそこに女がいるだろう。  
富田 はい、色白美人。  
猫 隣りに男がいるな。  
富田 あのロン毛持ち悪いよねえ。べたべた触ってさあ。付き合ってるのかな、とり憑かれてるといいうのは、ああいうのを言うんだよ。  
富田 あれ人じゃないの？  
猫 分からないか。  
富田 分からないよ。え、ロン毛死んでるってこと？  
猫 いや、あれは生霊。  
富田 ぜんぜん分かんねえ。  
猫 そりやそうか。本人たちだって分かってなさそうだしな。  
富田 一昨日、電車で会った時。  
塩谷 ウソ、あんな？  
塩谷 や、もつともつと。顔が覆われちゃって、よく見えなかったもん。  
富田 今は？  
塩谷 だって、それがあんなじゃん。  
富田 え、  
塩谷 お守り。  
富田 これってそういうモノなの？  
猫 どう思う？  
富田 質問に質問で返すの、やめてくれません？あたりを見回す。人も、人じゃないものも、みんな顔をしかめていた。苦しそうだね。  
塩谷 苦しくない人なんていないよ。  
猫 四苦八苦って言うだろう。人はいつでも、それくらいは抱えてる。  
富田 苦しみだらげじゃん。  
猫 だから信仰があるんだよ。  
富田 でもさ、本当に神様なんているんだった



ら、世の中もつとマシでしょう。

猫 逆だよ。おまえみたいのが増えたから、神  
仏もいなくなっただよ。

富田 だって俺、救われたことないもん。そ  
りや信じなくなるでしょ。

猫 朝起きて、お経をひとつ唱えるだけでいい  
んだよ。

富田 無理無理、絶対意味ないそんなの。

猫 おまえはかわいいそうだなあ。

富田 はあ？

猫 目に見えるモノしか信じられないんだろ  
う。かわいいそう。

富田 本当イラツとするね、あなた。

塩谷 あたしもそうだなあ。

富田 みんなそうでしょ。

塩谷 見えないモノって、信じづらいよね。

猫 だからお経がいいんだよ。

塩谷 おじいちゃんみたい。これからどうする  
の。

富田 遠くへ行きたいなあ。

塩谷 飛ぶねえ。

富田 見たことないからさ。新潟に行ってみた  
い。

塩谷 その次は？

富田 そしたらもう日本海沿いに北上して、  
塩谷 山形、秋田、  
富田 そう、そういう感じ、  
猫 最後は北海道か。

富田 もつと行くね。ロシアまで行っちゃう。

塩谷 それ一週間で出来ないでしょ。

富田 ロシアはさすがにきついかもね。でもも  
しそれ出来たら、その一週間の前と後で  
は、ぜんぜん違う自分になってんじゃないや  
いかって気がする。

塩谷 違う自分、なりたい？

富田 なりたい。でもたぶんもう遅い。

塩谷 遅いとかないでしょ。あたし、昨日と今  
日で全然違うよ。

富田 へえ、  
塩谷 多分、人が変わることに早いも遅いもな

塩谷 まだ行くの？

富田 行くよ。だってまだ千葉だよ、  
塩谷 会社にはなんて言ったの？

富田 無断欠勤。

塩谷 最低。

富田 え、そつちは？

塩谷 親戚殺しちゃった。

富田 おまえも最低だよ。

塩谷 いやいや無断のほうがまずいでしょう。

富田 いいのいいの。一週間くらいフラフラし  
ちゃおうかなあ。

塩谷 クビになるよ。

富田 上等上等。

塩谷 一週間あつたらどこまで行く？

富田 そうねえ。まず、霞ヶ浦は見たいな。

塩谷 何それ。

富田 知らない？茨城にある湖。湖？海なのか  
な。

塩谷 じゃまず茨城へ向かいます。その後は。  
富田 日本海かな、

いんだよ。だって勝手に変わっちゃうん  
だもん。

富田 でも、変わったところで間に合わないこ  
となんてたくさんあるでしょ。

塩谷 それはその間に合わなかったことに、ど  
う接していくかって話じゃないのかな。

富田 だから。俺はもう、間に合わなかったこ  
とそれ自身が嫌なの。

塩谷 じゃあ消せる？そのことを。

富田 消せないよ。

塩谷 そうでしょ。せいぜい見ないフリするく  
らいでしょ。

富田 よし北海道行くか。

塩谷 はあ？

富田 鮭食べたくなっちゃった。

塩谷 意味分かんないわあ。

富田 意味は後からついてくる。

塩谷 海を見ていた。空が青く澄み切って、雲  
ひとつなかった。風がやんで、波が穏や  
かで、

富田 また何かいるね。  
塩谷 遠くのほうで、昨日見たような怪獣のたぐいが泳いでいるのが見えた。  
富田 あれ何なんだろうね。  
塩谷 (笑いだす)  
富田 何、  
塩谷 ナンナンダロネばつかだよ、ずっと。  
富田 本当だよね、ごめん。  
塩谷 違う。楽しいの…。ふっと、あの人の顔がよぎった。  
塩谷、カバンの中を探る。  
富田 銚子の駅前、行ってみようか。  
塩谷 ん…、  
富田 鮭食べようよ。  
富田、歩き出す。  
塩谷のカバンから、指輪が出てくる。  
塩谷 ごめん。  
見ないんだから。  
塩谷、退場。  
富田 じゃ何。俺は今何が見たいの？  
猫 そんなこと俺は知らないよ。  
富田 (去ろうとする)  
猫 待って待って。どこへ行く。  
富田 探すんだよ。  
猫 見つからないよ。たぶん、おまえにはもう見えない。それよりちよつと付き合え。  
富田 どこに。  
猫 用事だよ。  
富田 いやだよ！てかもう、何なの？いつまで付きまとうんだよ。いい加減にしてよ。  
俺もう嫌なんですけど。  
猫 そうか。  
富田、退場する。  
程なくして、戻って来る。  
富田 どこ行きたいの。

富田 (振り返る)  
塩谷 無理だ。これ以上行けない。  
富田 どうしたの、  
塩谷 ごめん、これ以上一緒に行けない。無理だ無理無理無理だよ。  
富田 何言ってるんの、  
塩谷 近寄らないで。分かったの。あなたとこれ以上、一緒に歩けない。だってそれ、いつか穴ぼこに落ちるもん。真つ黒い穴ぼこ。  
富田 ひつどい言われようだわ、  
塩谷 ごめんなさい。でも思ったの。あたし、今持っているものひとつも失くせない。  
富田 あのみ、  
塩谷 ごめんなさい。  
塩谷、頭を下げる。  
富田 塩谷…？嘘でしょ…。塩谷が消えた。  
猫 嘘じゃないよ。起きていることはすべて本当で。おまえは世界を見たいようにしか

猫 いいのか。  
富田 そんな遠くはやだよ。  
猫 ちよつとした寄り道だよ。すぐ済む。  
富田 猫が言うまま、車を走らせた。総武線に沿って八日市場まで。293号線に入って西へ進む。東京が近づいてくる。東京の先には埼玉があつて、あのアパートがある。猫は黙り込んでいた。  
猫 ここだ、左。停める。うん。  
富田 佐倉の駅前だった。ちよつと電車が رفتるところらしく、人がわらわらと出てくる。ロータリーのあちこちに車が停まつていて、その中にサラリーマンや、高校生たちが吸いこまれていく。家族のお迎えなんだろう。人ごみに混じつて、真つ黒い塊が階段を降りてくるのが見えた。  
猫、クラクションを鳴らす。  
富田 ちよつと何してんの！？黒い塊が立ち止まつて。こつちに寄つて来た。

一子 シゲルくん？  
富田 一子さんだった。ドライブの帰りという  
苦しすぎる言い訳を一子さんはあつさ  
り信じた。家まで送ることになる。  
一子 そこを右。うん。ありがとう。ここでい  
いよ。  
富田 あ、はい。  
一子、シートベルトを外す。  
一子 うち狭いけど、ちよつと寄ってく？  
富田 いや、大丈夫。車停めるところもないし。  
一子 そう。  
富田 ……、  
一子 こないだごめんねえ。びつくりしたで  
しょう。  
富田 いや、ぼくは。うちもよく、ああいう喧  
嘩するし。  
一子 八王子のみんなは仲いいよね。  
富田 そんなことないよ。  
一子 あたし誰にも挨拶しないで帰ってき  
る。  
富田 暮らせてないよ。みんな行き詰まっ  
てる。  
一子 でもあたしなんかよりずっとマシで  
しょう。  
富田 マシって何だろね。  
一子 ゴメン、ばかなこと言ってる。  
富田 いや、  
一子 あたし、ダメなんだよ。呪わしいの、世  
の中のいろんなことが。我慢できなくな  
るの。  
富田 一子さんが頭から、黒い霧に包まれてい  
く。  
猫、袱紗を取り出し一子に持たせてやる。  
一子 猫、  
富田 見えるの？  
一子 見えるって？  
富田 いや…、  
一子 かわいいねえ。おまえ、どこから来たの。  
富田、しばらく一子が猫をあやすのを見てい

ちゃった。  
富田 知ってる。  
一子 瞬に怒られたよ。  
富田 一子さん、別に悪くないでしょ。  
一子 でも仕方ないもん。姉ちゃんももっと堪  
えるよって。  
富田 だったら瞬さんだって、もっと一子さん  
守ってもよかつたんじゃないのって思  
うよ。  
一子 ありがとう。  
富田 いや。  
一子 シゲルくん、叔父さんそっくりになった  
ね。  
富田 そう？  
一子 あたしずっと、八王子の子になりたかつ  
たんだよ。  
富田 なんて。  
一子 だつてうらやましいよ。みんな仲よく  
て。それぞれ好きなこととして立派に暮ら  
して。

る。  
富田 俺、会社の金遣いこんでるのね。  
一子 え、  
富田 いろいろ入用でさ、最初はちよつと借  
るくらいのもりだった。けど一回やっ  
たらもうダメで全然止まらなくなつて。  
一子 シゲルくん、  
富田 経理もそろそろ気づいたつぼくて、いよ  
いよ死ぬかっていうね、  
一子 それ本当？  
富田 ……なんてねー。  
一子 やめてよ怖いこと言うのー。  
富田 でもさ、そういうことってあるじゃん。  
みんななんともない顔して歩いてても、  
どうせ何かしらあるから。だから何か、  
そういう黒い気持ちみたいの、すげえ分  
かるっていうか、  
一子 シゲルくんも、やつぱり何かある？  
富田 あるよ。あるある。  
一子 そりゃそうだよな。

富田 そうだよ、  
一子 逃げたいなあ。  
富田 え、  
一子 遠いところ。  
間。  
富田 どうせツケは回ってくるけどね。逃げ  
たって。  
一子 分かってる。  
富田 でも俺、一子さんすごいと思う。だって  
ちゃんとしたいから、昭島まで来たんで  
しょ。  
一子 うん。  
富田 ぜんぜん逃げてないじゃん。むしろ攻め  
てる。  
一子 だってそれまで、20年逃げてきたんだ  
よ。逆に逃げ疲れたよ、  
富田 あー、  
一子 だから一回くらい会ってみようって  
思ったの。そしたらああいう、ね。ツケ

が回ったんだね。  
富田 でもやっぱ、すごいよ。  
一子 すごくない。全然。  
富田 また会いに行くでしょ、伯父さん。  
一子 分かんない。行こうかな。  
富田 あ、うん。  
一子 これ…、  
富田 えっと、よかつたら持ってたよ、  
一子 そもそもこれ何、  
富田 いや、開けないで。あの。すごく効く御  
守りなのね。だからあの、  
一子 ありがとう。じゃあ、また。  
富田 うん、

一子、退場。

富田 用事ってこういうこと。  
猫 どう思う？  
富田 それログセじゃんね。どうして気づかな  
かったんだろう、  
猫 元氣か。

富田 見ての通りだよ。  
猫 ずいぶんしょうもないことやってますな  
あ。  
富田 何も言い返せない。  
猫 (笑う)  
富田 もう、帰ろう。  
猫 ロシア行かないのか。  
富田 勘弁してよ。さっきカード止められ  
ちゃったし、  
猫 そうか。  
富田 帰るよ。  
猫 おまえの好きにしたらいい。  
富田 でもさ、超恐い。  
猫 どうした。  
富田 だってこれから、全部失くすもん。  
猫 お前ね、犬吠埼行ったことあるんだよ。  
富田 いつ？  
猫 赤ん坊の頃だな。6人で車に乗って、あの  
辺りをドライブしたんだ。  
富田 憶えてるわけないわ。

猫 だから下の子はかわいそうなんだよ。親と  
いる時間が一番短い。  
富田 そうでもないけどね。十分よくしても  
らったし、いろんなこと教わった。  
猫 うん。  
富田 なのにこんなことになった。  
猫 うん。  
富田 謝りたい、  
猫 おまえはさっき、全部失くすって言った  
ね。  
富田 うん、  
猫 これからおまえが失くすのは、必要のない  
ものばかりだよ。  
富田 うん、  
猫 全部失くすわけじゃない。大事なものは、  
何ひとつだって失くさない。

猫、富田の肩にそっと手を置く。

富田の部屋。

富田 気がついたら自分の部屋にいた。誰もい

なかった。八王子で横浜線に乗り込んでから、3日目の夜だった。布団に入っても眠れなくて、一晩中スマホをいじっていた。空が白んでくる頃、短いお経を見つけた。

諸悪莫作  
衆善奉行  
自淨其意  
是諸仏教

塩谷 悪いことはよしなさい。よいことをやりなさい。心を清くもちなさい。これが仏の教えだよ。みたいな感じかなあ。

富田 それ、身も蓋もないね。

塩谷 そう？

富田 だってそんなシンプルに言われても。そりゃそうだろうけど、そんな風に来たらら苦労しないよ。

塩谷 だから唱えるんじゃないのかな。ほら、口に出して言ったことは実現しやすいつて言うでしょう。

けどさ、

塩谷 うん、

富田 また塩谷と話したい。

塩谷 いいよ話そう。あたしも話したいよ。

富田 多分しばらく無理なんだけど。

塩谷 あたしもたぶん、しばらく無理だ。

富田 でも落ち着いたら、また、

チャイムが鳴る。

塩谷 彼女帰ってきた。

富田 違う。だったら勝手に入って来る。

塩谷 じゃ誰…？富田くんは答えるかわりにかぶりを振った。それから短く息を吐いて。消えた。

富田、退場。

塩谷 彼とはそれ以来会っていないし、話してもない。一度だけLINEを送ろうとしたら、彼のアカウントが消えていた。少し経って気になって、今度はメールを送

富田 だから、それで出来たら苦労しないでしょ。

塩谷 いや出来ないからそうなったんでしょ。

富田 …てゆうかどこ行ってたの。なんで消えちゃったの。

塩谷 おうちに帰ったんだよ。金魚にエサをあげて。旦那さんとごはん食べて、お話ししたの。

富田 俺のこと話した？

塩谷 話すわけがない。

富田 何にも失くせないんだもんね。

塩谷 そうだよ、何にも失くせない。

富田 じゃあどうしてこんなところにいるの。

塩谷 あなたが見たがったからでしょう。今ここで、あたしを。

富田 あなたまた消えちゃうのかな。

塩谷 それはあなた次第だよ。

富田 ……。

塩谷 今日は会社行くの。

富田 行けるわけがない。少し先かもしれない

ろうとして彼の連絡先も消えていることに気がついた。また少し経って共通の友人たちに会った。私が富田くんの噂話をふると、みんな誰それと言って変な顔をした。あの日、私が失くしたくないと思った生活は今も淡々と続いていて、旦那さんはいまだに牛タンと連絡を取り合っている。天気の良い日に、一人で実家に帰ることになった。京王線から南武線へ乗り継いで、小田急線で本厚木まで行く。駅を出てバスを待つ間、気が変わって歩きたくなった。プラザボウルの脇を抜けて、一番街を歩く。昔バイトしたカラオケ屋の前を通って、市役所の方へ抜けていく。ふと、友達がやっているカフェに寄ろうと思って路地を曲がったところで、猫がいた。